



『こころ』の解釈を通して、 近代文学を「おもしろがる」

京都市立京都工学院高等学校教諭

船越 康平

※京都市立京都工学院高校は、2016年4月開校の新設校。

はじめに

二〇一五年一月二〇日、堀川高校（筆者の二〇一五年度までの勤務校）教育研究大会において、人間探究科^{注1}の二年生二〇名を対象に、夏目漱石『こころ』を題材とした公開研究授業を行った。教科書採録部分^{注2}の教材に加え、事前（秋期休業時）に各自が読んだ『こころ』全編を対象とし、レジュメや板書を用いた発表と、質疑応答を交えた授業である。

教材観

『こころ』は、日本近代文学の中で、最も広く読まれている作品の一つである。友情と恋愛のせめぎ合いの中で、背徳と罪障の物語が展開され、読む者に人間の倫理の極限状態を連想させる。人間について深く洞察し得る作品に正面から向かい合い、生徒たちが自身を省みる契機とする。

生徒観

人間探究科に所属する生徒ゆえ、一般的な意味で「国語」に対するモチベーションは低くない。与えられた課題については、極めて真摯に取り組むことができる。しかし、真面目さや素直さが最大の特質である反面、与えられた・

（注1）堀川高校には、普通科・探究科の二つの科がある。探究科は二次次より、人間探究科・自然探究科に分かれる。

人間探究科は、人文系統の学習を深め、人間の文化・社会・行動などについて探究する専門学科である。

（注2）「下 先生と遺書」の一部。

言われた以上の事柄に主体的・能動的に取り組む意欲や、自らの意志をエネルギーギッシュに表現する爆発力には若干欠ける。

そこで年度当初から、アクティブラーニングの手法（グループワークやペアワーク）を取り入れつつ、様々な形で思考に揺さぶりをかけている。後期に入り、『こころ』を読解・研究する中では、随所でリーダーシップを発揮し、討議や発表のイニシアチブを取ることのできる生徒が増えつつある。それらの生徒をモデルとして、学びの姿勢をいかに持つべきかを見習う空気が醸成されはじめている。

指導観

全編を踏まえる観点を常に持ち合わせながら、教科書採録部分での「先生」の心理的な動きを丁寧な追い、グループでの研究も取り入れて、多様な解釈の可能性を追究する。本作品に投影された近代的知識人の葛藤と心の揺れを、個人・グループで研究することで、新たな解釈の可能性をも模索することができる。

生徒同士、教師と生徒における双方向的なやり取りを通して、講座全体としての理解が深まることと、各個人が自らの理解や考えを言語化・文章化できるところにまで導くことをターゲットとする。特に、グループで共有した事柄について他者へ説明する機会を設け、自らの理解や考えを言語化・文章化して周囲の仲間に戻

元する。そこから、「国語」を講座全員で「おもしろが」り、さらなる学びの意欲を発動させるサイクルを確立したい。

本時までの取り組み

第一次

物語全体の骨子を把握する。その上で、愛・エゴイズム・倫理的葛藤などのキーワードに触れながら、解釈の可能性について理解する。また、夏目漱石についての研究では、どのような観点が課題となっているかを理解する。

第二次

全編の内容理解に基づいて、教科書採録部分についての理解を深める。四人×五グループに分け、各グループに研究テーマを割り振り、資料を作成させる。

本時の展開

第一・二次の取り組みを経て、第三次として、

①グループでの担当テーマに関する発表

②質疑応答

③授業者のコメント

④ワークシートへのまとめ

という授業を行った。その二時間目が、本研究授業である。

発表するグループは、割り当てられたテーマに沿って資料（レジユメ）を作成し、自分たちの解釈と鑑賞について発表する。聴き手の様子

を掌握しながら双方向的にやり取りすることを意識する。やり取りを通して、自分たちの解釈の妥当性を確認し、新たな鑑賞の可能性を追求する。聴き手は、適宜メモを取りながら発表に耳を傾ける。「質問は創るもの」であるという姿勢を堅持しながら、自らの理解が至らない点を補い、納得のいかない点については考えを相手に正確に伝えることを心掛ける。

事前に各グループに与えていた研究テーマは、たとえば、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ。」と言い放ちました。」や「彼の超然とした態度はたとい外観だけでもせよ、敬服に値すべきだと私は考えました。」といった文について、①何を意味するのかを調査・検討し、②自分（たち）の読みと考察を行い、③研究成果をレジユメにまとめる、といった具合である。他のグループも同様で、研究対象は、ある一文（あるいは一節）という、分量としては短いものである。このような、短い様々な解釈と鑑賞の可能性を持つ部分について、多様な角度から検討する。発表は、一グループ一五分以内、グループのメンバー全員が前に出るスタイルで行う。発表前に板書を行い、レジユメを効果的に用いながらプレゼンテーションをする。レジユメの末尾には、参考文献も示させる。

各グループの発表

各グループにおいての役割分担、レジユメの

内容、研究スタイル、議論の進め方については、生徒自身に考えさせた。ここでは、本校独自の専門科目「探究基礎」^(注3)で学んだ手法が活かされるよう、授業者として働きかけている。

前述の「精神的に向上心のないものは馬鹿だ。」と言い放ちました。」を研究対象としたグループは、以下の①～⑤のように、細かな分析を経て結論を出した。（生徒レジユメ1参照）

①「精神的に向上心のないものは馬鹿だ。」は「先生」からKへの言葉だが、以前、逆にKから「先生」へ同じ言葉が投げかけられたことがあった。その際のKの言葉を分析する。

②「精神的に」という言葉を理解するため、「こころ」が著された当時における「個人主義」の観念について考察する。

③「向上心」について、それまでに描かれてきたKの信条を視野に入れつつ解釈する。

④「馬鹿」について、サンスクリット語や「馬鹿」という言葉の変遷に迫り、あるいは地政学的な面から考察して、その意味を吟味する。

⑤以上の考察を踏まえて、「精神的に向上心

(注3) 堀川高校における「総合的な学習の時間」と教科「情報」の授業を合わせた校内的な呼称。未知のものを明らかにしようとする際に必要となる知識・技術・技能を身につけることを目的とし、課題発見、解決型の授業を展開する。少人数講座（ゼミ）において研究を進め、一年半の期間を経て、最終的には個人論文を完成させる。

のないものは馬鹿だ。」の解釈をまとめる。
 「全員がプレゼンを行うこと」を条件としたため、概ね自分の担当箇所を発表時に話すケースが多かった。発表後の質疑応答では、活発な

議論が展開されると同時に、予期せぬ方向へ議論が進展するケースもままあり、講座全体で「おもしろがる」ことに大きく成功した。グループで研究することで、個人の気付きに終始さ

せることなく、メンバー同士による読みの深まりに繋げることができた。自らがリサーチした研究成果や、探し当てた参考文献をメンバーと共有する光景も垣間見られた。

生徒レジュメ1 (部分)

「ニコロ」 2班 レジュメ

【担当カ所】

四一 「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」

(参考) 三十 「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」

一. Kから私へ『精神的に向上心のないものはばかだ』(三〇)

▼ Kとは

◇ 真宗寺の次男に生まれ、中学の時に裕福な医者の家に養子へ。

◇ 医学を学ばせたいという養家の医師に背いて、大学は隠れて文科を選ぶ頑固者。

◇ 常に精進という言葉を使う。(一九)

↓ Kは道のためなら養父母を欺くまでの決心を持っていて、実際に努力をした。

▼ Kが家の者と親しくなっていくのにあまりいい心持がせず、旅へ誘う。

▼ 旅の途中、日蓮の事について、私を取り合なかつたのを快く思っていなかつた。(二〇)

↓ Kは前近代的な思想で言った。

▼ Kがお嬢さんのことが好きだと気付いている。

↓ 先生の受け取り方…『ただ笑って受け取るわけにいきません。』(三〇)

二. 精神的に

当時の個人主義

・ 他人の個性の尊重、義務や責任の重視という倫理性を強くともなうもの

生徒レジュメ2 (部分)

彼の超然とした態度はたとい外観だけでもせよ敬服に値すべきだと私は考えました。

超然とした態度：平然とした態度

問一、Kはなぜ先生の告白を聞き、超然とした態度でいられたのか？

Kは死を覚悟していたため先生とお嬢さんの関係性については何も思わなかつたから

《Kの生い立ち》

寺の家主生まれ 医者の子になる

養家の意向に背き独断で進路を変更 (教科書 p.168)

↓ そのことが養家、実家に知られて双方から絶縁される

Kは自分の「道」を持ち、強い信念を持っていた

お嬢さんに対して恋愛感情を持った瞬間、

Kは自分の道から逸脱してしまったことに気が付き、自殺する覚悟を持った

根拠① Kの告白 (教科書 p.184)

「覚悟、ー 覚悟ならな(い)こともない。」

恋愛をやめる覚悟ではなく、自殺する覚悟 (同ページ 116)

根拠② Kの遺書 (教科書 p.196)

「薄志弱行」 自分が恋愛感情を抱いてしまうほどに意志が弱く、

周囲に背いてまでして自分の道を確認しようとした以前の自分に反する

「到底行く先の望みがないから、自殺するというだけなのです。」

各グループの発表を受けてのまとめ

発表を受けて、各グループ内で五分間、意見交換をした。「おもしろがる」気持ちの発動を感じながら、ワークシートに学びの内容（発表を聴いて、分かったこと／発表を聴いて、グループで討議した内容／それに対する自分の考え）を整理した。授業や発表を通じて得た知識や理解を、他者にも分かりやすい形で言語化できているかどうかを確認させながらの進行である。その後、講座全体での質疑応答も行った。その内容もメモを取り続け、「おもしろがる」気持ちを利他的な気分にならせず、書くという営為を通して形として残させることに留意した。

本教材の展開における、授業者としての最大の狙いは、「近代と前近代の相克」を意識させること」にあった。夏目漱石の文学作品は、明治の知識人の生き様と不可分の関係にあり、作中の登場人物たちを通して人間の自己に対する欲望と執着、他者との関わりの中で生じる葛藤・苦悩・呻吟を照射し、近代日本社会における日本人のありようを主題化したものと捉えることができると考えたゆえである。

各グループにテーマとして指定した箇所は、相互に関連し、かつ「近代と前近代」のせめぎ合いについて分析を余儀なくされるものである。その時代に生きた人間の内部に生じた葛藤や懊悩を強く感得させる場面や一節であり、補充し

合う点が多いと考えた。

あるグループは、研究の果てに「明治の精神」を「ポリフォニー（＝多声音楽）」から「モノフォニー（単声音楽）」に移行した（世間体を前提とする価値観から個人主義的価値観へ移行した）という興味深い結論を導き出した。また別々のグループの生徒同士が、授業内の質疑応答だけでは飽き足らず、休み時間に「日本の近代化」について議論し合う姿も散見された。まさに、近代文学の代表的作品を余すところなく「おもしろがる」様子があらゆる場面で見受けられた。その仕掛けとして、夏目漱石「ころ」は最も相応しい教材の一つなのではないかと捉えている。

授業を終えて

アクティブラーニングとは、「思考を活性化させる授業形態」のことであるという。近年、この手法の導入が声高に叫ばれる教育界であるが、個人的には、新しい呼称による新しいスキルが存在するものではないと考えている。国語に關して言えば、教科特性上、多くの先学・碩学により、「アクティブラーニングの手法」が既に実践されてきているのではないか。

中央教育審議会が検討する学習指導要領の全面改訂で大きく取り上げられたことにより、「アクティブラーニング」「能動的学修」について再考するチャンスを得ているのが、私たち国

語科教師の実情であると捉えている。

アクティブラーニングの実践的手法においては、集団討議やグループ学習により「拡散・分解」した概念を、論理的に「収束・統合」し得るかがポイントとなる。「ころ」の解釈を通して近代文学を「おもしろがる」ことを企図した本授業において、そのプロセスで「拡散・分解」させることに大きな成果を得た。質疑応答を受け、提出された個人ワークシートを授業者がまとめる形で定期テストに向かい、「収束・統合」の面でも着実に成果を残すことができた。アクティブラーニングの実践に際し、「拡散」に終わらず、「収束」し切ることが一つの目標となる。一方で、狙いを持って拡散のままに留めるケースもある。狙いなく拡散のままの状態に終わることが、最も生徒を戸惑わせ、手法に溺れることになるのではないか。

今後、「拡散→拡散」「拡散→収束→拡散」「拡散→収束→拡散→収束」など、様々なバリエーションの授業展開を実践していきたい。